

三年生選択授業

「国際理解」授業記録

version 3

2002 年 4 月～2003 年 2 月

授業担当者：中山 滋樹

久留米西高校では、2001 年度から総合的学習の試行を始めました。一学年で全員が同じ内容の授業 1 単位、三学年で総合選択科目 2 単位を学ぶことになっています。「国際理解」授業は、三学年の総合選択科目を一年間展開するうえでどのような課題があるかを調べる目的で試行したものです。この記録は、試行 2 年目の経過をまとめました。

授業の環境：

- ・東京とはいえ郊外にあるので、自然環境に恵まれている。都内でもっとも生徒が荒れていない地域といわれるだけあって、生徒は素直で、落ち着いた雰囲気である。
- ・学力的には平凡な水準で、大学入試の練習問題のことばかり気にする必要はない。
- ・授業を担当する教員は、一名のみ。時間軽減等はない。
- ・教室は、学級減で空いた教室を主に使い、小グループになったり、半円に並んだりとその日の内容に合わせて座り方を変えていた。
- ・予算措置はないので、細かい教材類は持ち出しになる。
- ・放課後や土曜日に生徒を学校外へ連れ出すことは、授業時間外なので許可されない。

授業の内容：

- ・参加型学習であることを心がける。
- ・国際標準に基づく教育の方向性に則ったものとする。
- ・毎回の学習が、相互に関係のあるものとなるように工夫する。

この記録集について：

- ・第一部は、「国際理解」の概念と、授業をおこなう際の問題点または障害。
- ・第二部は、二十六回の授業の記録。
- ・第三部は、生徒たちの年度末の創作課題作品集。

初めに、この講座の基盤となっているものについて

授業というものに関して、おそらく、“全てが新しい”ということはめったにないのではないのでしょうか。たいていは、たくさんの過去の事例などから学び、利用させてもらって、それで一年間の講座を成立させるというのが、全国の教室の風景だと思います。久留米西高校の授業も、多くはどこかに素がある活動を使わせていただいたものです。

それでも、授業記録をまとめたのには、いくつか理由がありました。ひとつには、総合選択科目を、担当教員が異動しても学校として続けられるようにする、という課題が最初からあったためです。つまり、「誰でもできるマニュアルを作ってくれ」と同僚からは言われていて（さすがに「誰でも」というのは無理だろうと思うのですが）、自分が転勤した後に使える学校内資料として作りました。

作る過程で、全国の先例をいろいろ探して気がついたのは、先例らしいものがなかなか見つからない、ということでした。書籍でもホームページでも、イベント的記録や短期プログラムばかりで、一年間という長期をどういう考えでどう展開するかについての記録には行き当たりません。「国際理解」という授業の要望は強いものですから、これは、多くの教員が自分と同じように困っているだろうなあ、と思いました。実際、先例がなく、参考プログラムもない授業は、毎回とても不安でした。そして今、まがりなりにも一年間のプログラムをやった者としては、これからやる人たちと経験を分かちあう責任があるように感じています。それが、この2002年度版は希望者に配布・閲覧できる形にした理由です。もちろん、この記録の内容は、完成されたプログラムにほど遠いもので、したがって真似るためのものではなく、あくまでひとつの提案に過ぎません。ご自身で授業をされる際に、「自分は、この点については・・・と考える」というように使える資料になればと思います。結論は各自で考えるにしろ、どういう点で考える必要があるのかという実例があると便利なのになあ、と自分でずっと思い続けていたものですから。ですので、学校における国際理解教育の考え方と、一年間プログラムの展開の具体例だという二点では、現時点では例が少ないので多少は使い道があるかと思っています。

上記の二点について、この先をお読みになるなかでいろいろと疑問をお持ちになるかもしれません。そこで、個人的なことになりますが、考え方の背景に触れておきます。大きい要素としては、学生時代から（80年代前半）、つまりまだNGOという言葉が世間にはないころからアムネスティ・インターナショナルの会員で、90年代のかかりの期間、週に5日は夜にアムネスティ東京事務所で働いているという生活をしていました。

（もちろん無給ですが、正規の職員だと思っている人がかなりいました）そのころは、主に広報的な部分を担当していたので、「NGO側から、教育を見る」日々でもありました。また同時に、市民活動の中で広まりつつあった「参加型学習」に接する機会も自然に増えていました。ただ、それらは断片的な知識に過ぎませんでしたが、前任が定時制高校だったので、午前中の時間を使い、国際基督教大学の千葉教授に、授業に参加させていただくなど様々な学びの機会を与えていただいたことが、国際的な教育の観点を知り、断片が全体的なイメージとしてつながったものになりはじめる契機となりました。そして、実際に参加型授業の概念と展開を学んだのが、David Selby教授のグローバル教

育セミナーでした。これもまた書き始めると長くなってしましますが、久留米西高校の授業はグローバル教育の概念を自分なりに解釈したものが基盤になっています。学校外のこれらの学びがひとつでも欠ければ、全く違った授業内容になっていたことでしょう。また、そのなかで一緒に考えたり行動したりしてきた多くの人たちひとりひとりからも、大きな影響を受けています。そして最後に、受講者である生徒たち自身が、同時に授業を形作る人でもありました。そのような経緯があつて、この記録にあるような授業になっています。ですから、かなりの部分で、個人的な要素が強く影響しているといえるでしょう。つまり、一般的マニュアルとはいえません。おそらくは、どなたがなさっても、長期的プログラムであれば必然的に授業の“場”を構成する教師自身、生徒自身が、重要な要素になるはずで、したがって、“場”が違うかぎり、全ての授業が個性的になっていくと思います。これから授業を自分で作る方々には、それぞれ個々の学校なりの授業になるのが当然だという考えで臨むのがよいだろうと考えています。久留米西高校の授業は、教員の影響で、人権教育的になりました。おそらく、教員の個性によりそれぞれの基本的な立場をかためた上で、実際の展開はバランス感覚を持った個別対応ということになるでしょう。生徒の発言・反応は、予想を超えます。それにどう応じるかは難しくもありますが、むしろ、教員も意外性をいっしょになって楽しむくらいの意識、または余裕を持って、あまり苦勞を見せずに(?)やったときのほうが結果はよかったような印象があります。

結果が浮き出てくるものとして、毎回の授業記録の最後に、生徒たちの授業へのコメントと自己評価が残してあります。また、途中からは、生徒による授業評価も毎回とりました。数値の評価とは別に、生徒たちの集中度がコメントの長さに現れていて、その日の授業の善し悪しは簡単に推察できます。“中身の濃い時間”を過ごした日は、コメントが長くなるわけです。授業記録と生徒コメントを読み比べることも、場合によってはいろいろと参考になるのではないのでしょうか。

この記録をお読みになって、けっこうしくじっているらしい(それは事実です)ことに恐れを抱く方もいらっしゃるかもしれません。そういう方にお読みいただきたい本のリストを最後に載せてあります。とても頼りになる本ばかりです。「読んで良かった!」と感じられることでしょう。

これから授業を計画されている方々に、多少なりともこの記録が役立てれば幸いです。そして、これはお願いですが、何らかの実践をされた方は、その記録をなるべく一般に公開していただけないでしょうか。今後の社会では、分かちあう(share)ことが更に重要となるはずです。ホームページなどで知識や経験を共有していくことが、一年一年の社会的な積み重ねになり、全体的な発展になります。ひとつの例、それが失敗例でも、いつかどこかでだれかの役に立つことがあります。小さな努力を、みんなでちょっとずつ10年続けたら、教育を通じた社会変化が起きるかもしれないと夢見ています。

この記録へのご意見・ご感想は、e-mail でご自由にお送りください。いつでも歓迎しております。(送り先: alex@ac.mbn.or.jp)